

## いよいよ加減な料金値上げ 県廃棄物処理センターへの焼却灰処理委託料

8月2日、生活産業委員会が開かれ、焼却灰処理料金の大幅値上げの問題などについて審議しました。

鈴鹿市のゴミのうち「可燃ゴミ」は、御園町の「清掃センター」で焼却処理されています。センターには年間約5万8千トンのゴミなどが持ち込まれます。そして焼却して残る「灰」が、約7千トンも出ます。この灰を、以前は埋立て処理していましたが、清掃センターを改築した03年度から、県が四日市に作った「廃棄物処理センター」に処理委託する方式に変わりました。

### トン2万円から、連続値上げで4万円以上に

なぜ鈴鹿市は自己施設での灰処理をせず県の処理センターに乗り換えたのか。それは、自己施設（溶融炉）を作れば30億円かかるが、センターなら10億円の分担金で済む、県は処理料金を、民間よりも安いトン当たり1万5千円程度だと説明（99年当時）、この話を信じた鈴鹿市はじめ多くの市町が「これは得だ」と計画に参加した、という経過があります。

ところが、この県の説明が大ウソだったのです。最近の県の文書でも「三重県の環境施策を推進するために当初料金を低く設定したことにより、現実の処理コストと著しく乖離し、収支悪化の最大の要因となった」と、はっきり告白しています。要するに、当時の北川知事の「環境先進県」という手柄を上げるために、市町村をペテンにかけたのだということです。

こんなデタラメな料金設定が、操業から2年目で破たんしたのは当然ですが、その尻ふきに料金の2倍もの値上げを吹っかけてくるなどとは、とんでもない居直りです。鈴鹿市の財政負担は、昨年までの単価2万円で1億4千万円だったのが、4年後に単価4万2千円という値上げ案では3億円にもはね上がります。大規模施設に参加したメリットは何もない、こんなことなら自前の施設を作った方が良かったのではないか、と思います。

# 日本一のボロ園舎から、ピカピカ園舎に変身 「ぐみの木保育園」が新規開園

7月24日、安塚町に移転新築した「ぐみの木保育園」の「開園を祝う会」に出席しました。ぐみの木保育園は、22年ほど前に無認可の共同保育所として、矢橋町の民家で4人の幼児で出発、その後神戸公園の前に移りこの7月まで、公立や認可園では満たされない保育ニーズを担って頑張ってきました。私も出発当時から、できるだけの応援をしてきました。

その園舎たるや、今ときこんな家が残っていたのかと驚くほどのボロ家を、何とか修繕してもたしてきたもので、初めて訪れた親が「思わず後ずさりした」という話が残っています。しかしその中で、子どもたちはのびのびと育ち合い、また親たちや保育者がいっしょにバザーや資金作りの事業、園の行事に取り組み、親子共に育っていく、あったかい保育園でした。

このたび苦労の末にやっと社会福祉法人として認可を得て、念願の新園舎が完成したのです。「祝う会」も、沢山の来賓、OBや「支える会」のメンバーが集まって、ワイワイといつもの雰囲気でも盛り上がりました。無認可時代のあのあったかい家族的な空気をなくさずに、新たな目標に向かってがんばってほしいと思います。

---

## 原爆パネル展、今年も図書館で開催

8月2日から7日まで、恒例の原爆パネル展（鈴鹿市原水協主催）を市立図書館ロビーで行なっています。今年は広島・長崎の原爆投下から60年という節目でもあり、また憲法九条の改悪が国政の焦点にもなるような情勢もあって来場者の関心も高く、「核廃絶」をもとめる署名にも多くの方が応じています。

私もパネルの準備や初日夕方の会場当番に出ました。今年から図書館は、平日の閉館時間が5時から7時に延長されたので、5時を過ぎても来場者が絶えません。勤め帰りのサラリーマンや、仕事を終えて子どもとやってくる親子連れなど、夏休みということもあって、夕方の開館は好評のようです。来る人たちの表情もゆったりしています。

7日（日曜）の午後1時半からは、となりの文化会館で「九条の会すずか」主催の「被爆体験を聞く」学習会が行なわれます。ヒロシマ・ナガサキの悲惨な体験を、被爆者自身に語っていただきます。どうぞお出かけください。

## 人間ドック、今年も「異常なし」でホッと

7月5日、国保の人間ドックを近くの鈴鹿クリニックで受けました。結果は特に異常なく、まずは一安心でした。ただ血液検査で「総ビリルビン」「γ-GTP」「尿酸」「善玉コレステロール」などが標準より悪いという指摘があり、これらの項目の説明を読むと、「アルコール」と「運動不足」が原因のようです。思い当たるところが大いにあり、反省する材料になります。が、実行はまだこれからです。

この医院は昨年、うどんのように細い「胃カメラ」を導入して、私も初めてそのカメラで検査をしました。従来のと違う点は、鼻の穴から入れるところで、喉の「オエッ」とする感じがありません。検査中も医師と話しながらモニター画面を見ることができ、自分の内臓の姿をリアルに見物できます。見ての率直な感想は、「牛や豚のホルモンと同じやなあ」です。

## ハズレの人には秋に「敗者復活」措置が

今回市の人間ドック募集定員1500人に対して2000人以上の応募があり、抽選でハズレの人が多く出ました。私は担当課に、人間ドックの趣旨からいって「当たり外れ」があるのはおかしい、もしハズレの人がガンになって死んだらどうするのか、などに見直しを求めました。検討の結果、今年のハズレの人には9月補正予算で対応し、秋には受診できるという案内をする、また来年度からは定員以上になっても全員受け付ける、との方向性が出されました。予防医療に力を入れれば、早期発見・早期治療がすすみ、健康な市民が増え、その結果として医療費の上昇をストップできるのです。

---

## 国保税引き下げの効果、窓口への苦情が激減

この7月中旬に17年度の国保税の金額が各世帯に通知されました。今年は平均5%の引き下げが実現し、かつ所得の低い層ほど引き下げ率が高いという内容になりました。

2年連続大幅引き上げをした昨年と一昨年は、窓口で市民が殺到し、電話回線がパンクするぐらいの混雑ぶりだったということでした。ところが今年は、窓口も電話もいたって静かだったということです。少し引き下げたとはいえ依然として高い税なのですが、それでも当局が引き下げの努力をしたことへの、市民からの評価が率直に現れている現象であると思います。

ずいそう

## 佐賀のがばいばあちゃん

お笑い芸人の島田洋七（漫才コンビ「B & B」）は、広島の母親の元を離れて小中学校時代8年間を、佐賀にいる祖母に預けられて過ごした。そのおばあちゃんがすごい（佐賀弁で「がばい」という）人で、戦時中に夫を亡くし、掃除婦をしながら七人の子どもを育て上げ、さらに孫を預かって育てた。生活は貧乏そのものだが、しかしばあちゃんは貧乏を恥じることなく堂々と、明るく生きていく。洋七少年はばあちゃんから、カネやモノより大切な人間の生き方を教わった。以下はその著書からの「ばあちゃん語録」である。

### 「うちは明るい貧乏だからよか。」

ばあちゃんは外出する時、腰に結んだひもの先に磁石を付けて歩く。そうすると釘や鉄クズが集まる。「ただ歩いたらもったいなかよ。磁石つけて歩いたら、ほら、こんなにもうかる。」

夕ごはんがない日、「ばあちゃん、腹へった」「気のせいや、もう寝なさい」夜中に「やっぱり腹へった」「夢や。」朝になって「朝ごはんは？」「きのう食べたやろ。さあ、学校へいけ、お昼に給食食べてがんばれ。」

通知表を見せて、「ばあちゃん、1と2ばかりでごめんね」「大丈夫、足したら5になる」「通知表って足してもいいの？」「人生は総合力！」

「ばあちゃん、英語なんてさっぱり分からん」「答案用紙に『私は日本人です』って書いとけ」「でも俺、漢字も苦手で」「『僕はひらがなとカタカナで生きていきます』って書いとけ」「歴史もきらいでなあ」「答案用紙に『過去にはこだわりません』って書いとけ！」

時計が壊れて止まってしまったが、「2時にはピタッと合っている、毎日2回は合っているから、2回見れば大丈夫。」

「貧乏には二通りある、明るい貧乏と暗い貧乏。うちは明るい貧乏だからよか。それも最近貧乏になったのと違うから、自信を持ちなさい。」

世間体など気にせず「ケチは最低、節約は天才」と、貧乏を楽しむように明るく生きていくばあちゃん。洋七少年は、「生きる力」をばあちゃんからしっかり学んだ。このベストセラーが、映画となって来春には見られる。吉行和子演じる「ばあちゃん」はどんなになるのか、今から楽しみだ。